

Ⅲ 調査成果の概要

1、主な遺構

(1) 鎌倉時代およびそれ以前

①土坑 493

調査区の南東部の 21 トレンチにおいて、地山面から発見された。平面形は方形で規模は一辺約 1 m 以上。埋土中から布目の付いた瓦が出土。土師器皿が 1 点共伴しており、時期は鎌倉時代終わりから南北朝時代と推定される。

なお平安時代以前の遺構は検出されなかった。

(2) 室町時代前期

①堀（溝 6）

38 トレンチの中央部と、33・32・28・26 トレンチで確認された。調査区の中央北寄りを中心とする。規模は、上端の幅が 4 m、下端の幅が 1 m で、深さは 2 m 以上になる（図 5）。この堀は、西に隣接する新町別館地点でみつかった堀につながる可能性があり、これをつなぐと、その総延長は 60 m 以上になる。下層からは 13・14 世紀代の陶磁器が出土、最上層から 15 世紀代の土器が出土している。

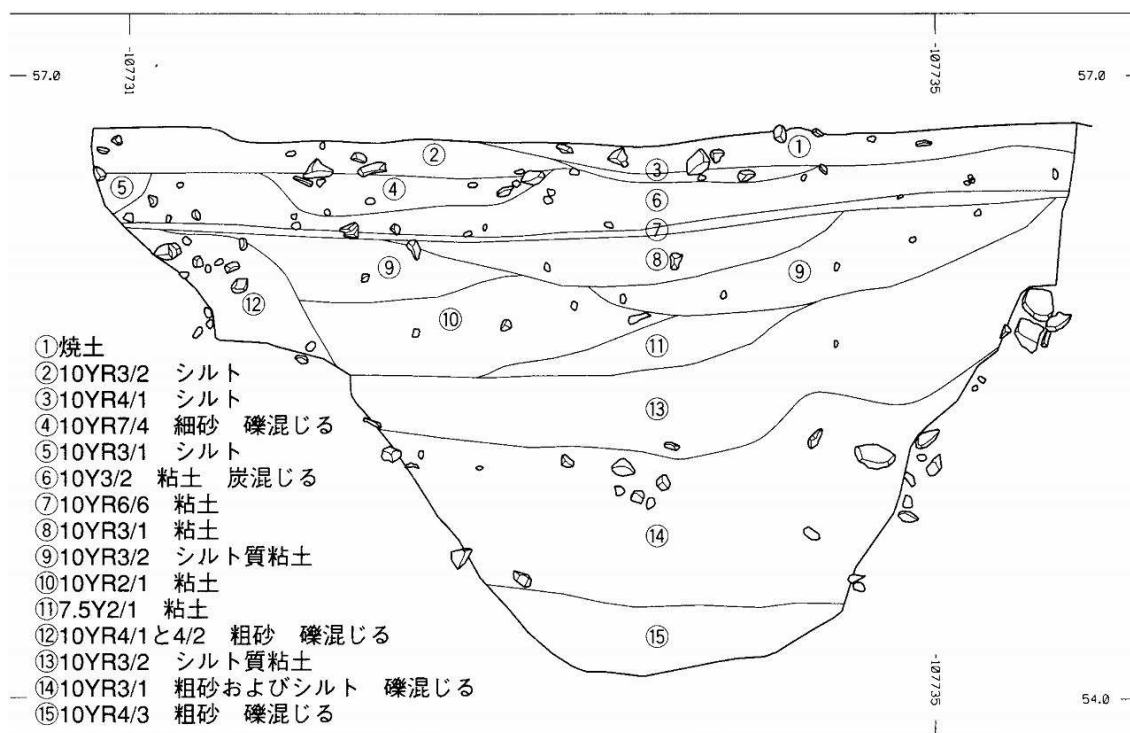


図5 溝6東壁断面図 (S=1/40)

図5 溝6 (トレンチ 26 東壁) 断面図

(3) 室町時代後期

①溝3

南西隅の8トレンチに位置する。規模は、幅が1.7mで深さが1mをはかり、断面形状はV字を呈する。軸は北東から南西に向いている。明治時代の井戸3と江戸時代中期の井戸2に切られ、さらに安土桃山時代の地下蔵(土坑339)に切られており、上層から16世紀前半の土師器皿および、14世紀代の常滑焼きの甕の破片が見つかった。

②井戸5

9トレンチに位置する。直径約1mの素掘りの井戸で、上層から16世紀前半の土師器皿が出土した。

(4) 安土桃山時代

①石列・柱列

1トレンチから、東西と南北に軸を合わせて、L字形に配置された石列が検出された(図6)。規模は東西が2m、南北が1.7mで、南は調査区外へ延び、西は真上を走っていたガス管のために抜き取られ、さらに近代以降の建物の基礎で失われている。面を外にあわせており、建物の基礎の端を整えた縁石の一部の可能性はある。なお時期は、この石列の上を覆っていた整地層から16世紀終わり頃から17世紀初め頃の陶磁器が出ているため、その直前にあたるものと考えられる。

またこの石列に平行してその北側から二時期にわたる柱穴列が検出された。平面形は直径約30cmの円形で、底部に根石をもつ。遺物を伴わないため、詳細な時期は不明である。

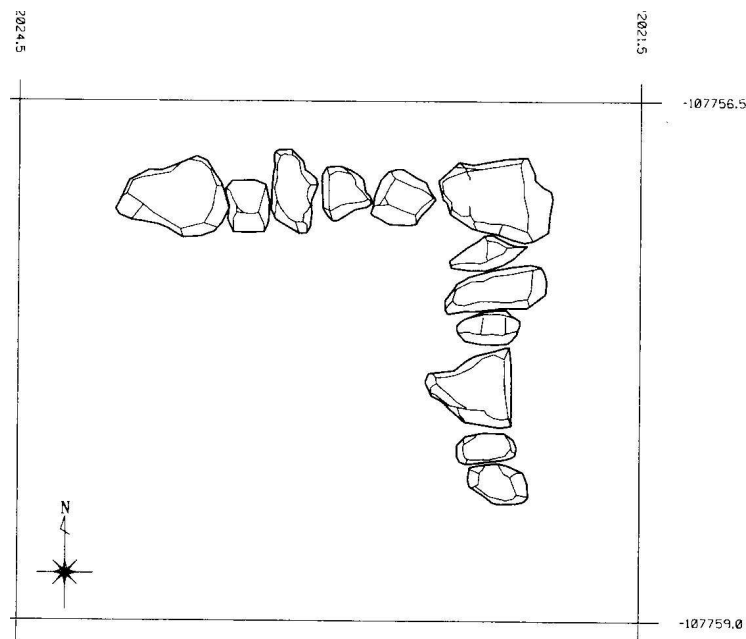


図6 1トレンチ石列実測図 (S=1/50)

②石組地下蔵

四箇所で見組みの地下蔵がみついている（1トレンチ土坑 41、6トレンチ土坑 104、8トレンチ土坑 339、20トレンチ土坑 492）。土坑 41 は1トレンチの東部に位置する。規模は南北 1.4m 東西は 1.2m 以上、深さは 45 cm で、基本的には方形であるが、南西隅は丸みをもつ。最上層から土師器皿が一括投棄された状態で出土した。土坑 104 は6トレンチの西部に位置する。規模は南北 1.2m、東西は 1.8m 以上、深さは 70 cm。下層で土師器皿の一括廃棄が認められた。

③土坑

土坑 441 は 13 トレンチの西部に位置する。1×1.5m の範囲から土師器皿が一括投棄された状態で検出された。遺構はなだらかに下降する浅い落ち込みで、土師器皿はその中央に盛り上がった状態で検出された。土師器皿の除去後、小礫の集積がみられたがその下部はそのまま地山に達していた。

(4) 江戸時代

①建物群

建物 2・3

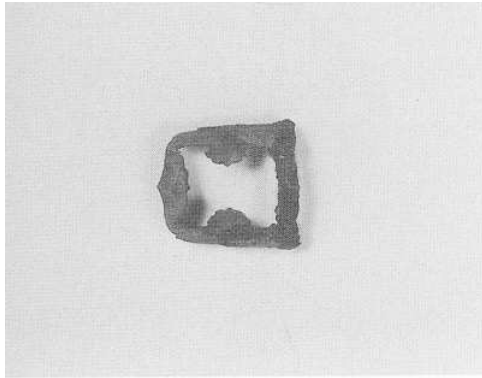
24 トレンチに位置する。トレンチの中程から北側の中央で せん列が検出され、その西側で焼土が、東側で礎石が確認されたため、便宜的に西側部分を建物 2、東側部分を建物 3 として遺物を取りあげた。建物 2 は、粘土で挟まれた、せん列の西側に最上層に焼壁片を含む焼土、中層に炭化した焼材、下層に礫敷きの堆積がひろがる。また南北の辺は、礫と備前窯甕の破片が並べられ、せん列は確認されなかった。規模は南北が 3 m、西辺はトレンチの西へ延びており、現存で 1 m を測る。焼土および炭化材の掘削途中で写真 41・42・43 などの金属製品が出土している。一方建物 3 の範囲内には礎石は存在するが、列を構成するに至らず、明確な建物を復原することはできていない。なお礎石を検出した最上面から埴塼（写真 40）が出土している。



写真 40

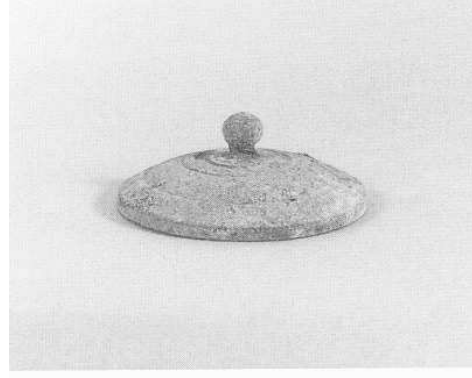


写真 41



42 24トレンチ建物2・3出土 柄飾り金具

写真 42



43 24トレンチ建物2出土 青銅製蓋

写真 43

建物 5

29 トレンチの中央西寄りに位置する。同トレンチは、その北半部全体にわたり、設計掘削深度に達するコンクリート製の基礎が残っており、その結果江戸時代の遺構面はトレンチの南半に限られるものとなった。建物5の平面形は、北辺の突出した凸形で、南西及び南東の隅は、それぞれ33・32 トレンチにのびる。規模は東西3.8mで、南北は最大長が5mである。周囲にせんを芯としてその両面に粘土を貼り、さらにその側面に石を並べた基礎および壁がめぐり、その内部には焼土がひろがっていた。焼土内から建物の時期を特定できる遺物は出土しなかったが、中央東寄りで炭化米の集積が認められた。なお建物5の西側で、建物5と同一面の焼土上面から、内面に赤色顔料の付着した瀬戸美濃窯の天目茶碗が出土した。時期は17世紀初頭頃に比定される(図8・写真46)。またやはり16世紀代に比定される瀬戸美濃窯の香炉が焼土中から出土した(写真47)。

その他、本トレンチからは、建物5と同様な構造をもった建物6、石組の地下蔵の一部と思われる石組4なども検出されたが、いずれも前記のコンクリート製基礎によりほとんどが削平され、全体を復原することはできない。



46 29トレンチ建物5出土 天目碗

写真 46



47 29トレンチ建物5出土 香炉

写真 47

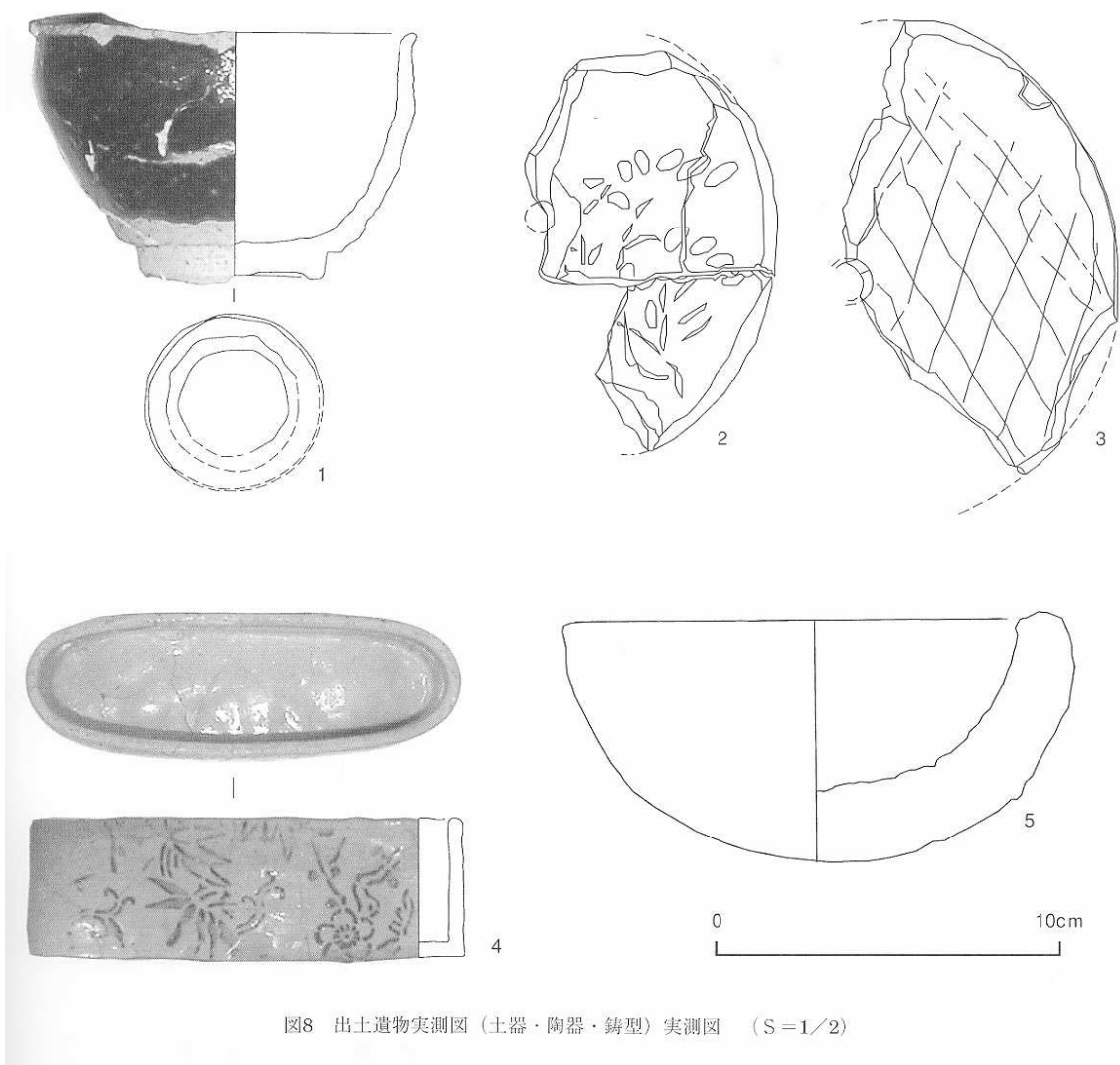


図8 出土遺物実測図 (土器・陶器・鋳型) 実測図 (S=1/2)

図8 出土遺物実測図 (土器・陶器・鋳型)

② 炉および炉状遺構

炉 1・2・4

23 トレンチに位置する。いずれもトレンチの北端に集中する。それぞれ炉 2 はトレンチの西壁に炉 1 は東壁に半分を残し、炉 4 はその中間に位置する。なお、炉 1 と炉 2 は同一面で検出され、炉 4 はその下層を作業面としている。形状はいずれも浅くくぼんだ円形で、底部に薄い炭層をもち、焼土などを埋土としている。それぞれの規模は、炉 1 の直径が 1 m、炉 2 の直径が 1 m、炉 4 の南北長が 0.9m である。なお、炉 1・2 の基盤層は黄色粘土であり、その下層の一部には礫が敷かれていた。江戸時代前期対応層での検出である。

炉 11

26 トレンチの南西隅に位置し、江戸時代前期対応層で検出された。礫を円形に集積させ

た遺構である・規模は直径 0.5m である。熔解炉基礎の可能性が考えられる。

その他の遺構

石組 3 は 35 トレンチの西端部に位置する。方形に加工した花崗岩を積み上げて築造された地下式貯蔵庫の形状を示す。確認された部位は、予想される方形プランの東辺から南東隅であり、トレンチ内での規模は南北 2.4m、東西 1.2m である。なおわずかに確認された南辺には、石組は築かれていなかった。埋土は焼土・焼壁などが投棄された状態の上層（層厚 0.8m）と粗砂の均質な堆積による下層に分けられ、下層の上面は固くしまり、薄い炭層が形成されていた。石組が南辺に無い点、下層の粗砂層が投棄された状態でない点、下層上面が床面のような状況を示していることから、一般的な貯蔵庫以外の性格も考えられる。上層から青銅鏡・美濃刷り絵鬢盥（17 世紀末）などが出土している（図 8・写真 51・52・53）。

井戸 10 は、20 トレンチのほぼ中央に位置する。検出面が基礎の設計深度に達していたため、埋土の掘削はおこなっていない。平面形は円形で規模は直径 1 m である。埋土はすべて焼土であり、表面の精査の際に金属滓が出土した。



写真 51 35 トレンチ地下蔵（石組 3）出土 青銅製柄鏡



52 35 トレンチ地下蔵（石組 3）出土 青銅製容器

写真 52



53 35 トレンチ地下蔵（石組 3）出土 鬢盥

写真 53

(5) 明治時代

①建物1

西部中央よりのトレンチから明治時代以降と思われる建物の基礎とそれにつながる道が見つかった。基礎の大きさは南北5 m以上、東西3 m以上で、外側は高さ1 mの漆喰でつないだ石垣が巡っている。道はその南東隅に取り付くかたちで、やはり両側に石垣を設けている。また、基礎の石垣のすぐ内側には、土管をつないだ排水施設も設けられている。高さ1 mの石垣基礎は調査区の北をはしる上立売通りの高さに合わせたものと思われる。